

## 假宅話

泉鏡花作

一

新しい襖あたらひから、あどけない、上品じやうひんな顔かほで、一寸ちよつとまぶしさうに覗のぞきながら框かまちへ出でた、――引詰ひつゝめの銀いて杏返ふがへしも油氣あぶらけのない埃ほこりだらけ、かすりの綿入わたいれの襟附えりつきに、めりんす友染いづせんの半幅帯はんはつおび、きぬてんの足袋たびと云いふ、煤すす拂はきの上被うへひだけ唯今たゞいまぬ脱ぬぎましたやうな風ふうを見ると、薪まき町邊やうあたり、此この土地とちで、看板かんばんといひ、姉ねえさんといひ、名の聞きこえた元藤家もとふぢやのお取次とりつきらしい様子やうすはない。いや、その取次とりつきではない。かうした家いへの取次とりつきをする抱妓かゝへ、雛妓おしやく、仕込しこみとか言いふものらしくさへないほどに、引ひツかぶつた姿すがただが、内うちの娘むすめだ。――と、いま訪おもつれた男おとこには一目めで分わかつた。

媚なまめかしく褻つまを取とつたり、品ひんよく裾すそを曳ひいた、お母つかさんの風采とりなりには似にる筈はずもないけれど、目鼻めはなだちから、すらりとした脊恰好せかつかうは、此この年としぐらゐの若わかい時ときの、その、お母つかさんにそつくりである。

唯、と 框かまちと土間どまで斜違はすかひに向合むかひあふと、豫かねて聞きく一人ひとりむ娘すめの祕藏ひひょうだから、悪わるく下目しためづかひをしたり、額ひたひで人ひとの顔かほを覗のぞきなどするのではない。何なんの蟠わたかまりもないやうに、ぼんやりと客きやくを見て立たつた。裙すそにこぼれた紅入べにいりの襦袢じゆばんの端はしにも、年としらしい色氣いろけは見みえないのである。

「お内うちかい．．．．．」

それでも、お．．．．．母つかさんと言い口くちはなかつ

た。

「姉ねえさんは？」

「はあ、あの．．．．．」

「お留守るす。」

「いゝえ、あの．．．．．」

藝妓家げいしやを訪たつねて、お取次とりつきが此この調子てうしでは、大たい概がい分わかる。――客きやくは最もう引返ひきかへしさうにして、

「いや、些ちつとも用事ようじのないものです。．．．．．

また重かさねて．．．．．」

「誰方どなた。」

と、こゝで輕かるく手てを支ついた。

「桑くは．．．．．」

と皆みなまで言いはせず、

「分りました。――おほ。」

と、しとやかなものごしで、すぐ一重へだての襖を細目に、口許はかくしつゝ、うつくしい鼻筋を斜に、三日月眉の凜とした目ばかりで差覗いた。色の白い頸脚が、無理なあがきの姿態ゆゑ、伸びるばかりにスツと長いのに、ちらりと搦んだのは、透通るやうな紅羽二重で、

「ほゝゝ、分つては居たんですが、こんな、うまい態だもんですから。」

と言ふうちに、掛けた手のおもみで、襖が、近づて、思はず露れた半身は、おなじ其の紅で、雪の二の腕をくびつたやうな筒袖の間着ばかりで居たのであつた。

これは、しどけなさを通越して、人丈の京人形を裸身にしたやうなのを、顔を見せながら、襖一枚に隠さうとは、忍術つかひでないとな難かしい。

桑――と言つた男は、すぐに見て取り、

「これは。」と口の裡で。……すり硝子

の戸口の方へ片足を退いて言つた。

「お出掛けの處だね。」

時刻も丁どである。

「秋島さんへ、五時のお約束、……え、

それだもんですから。」

そのまゝ襟を引合せて、

「まあ、一寸何うぞ。——こんなひどいバラ

ツクですが。」

「あなた、お上んなさいましな……さあ、

あなた。」と案内ぶりに、娘も立つた。

桑は左右猶豫つたらしかつたが、二人が襖へ隠れ

たので、潮時の暮方の、土間を、釣上げられた形に、

ぼつんとして框へ上つて、「でも、しかし、何だ

ね、お邪魔をしますね。……實はね。……

・・・松江さん……」

「御免なさいませよ。」

と、姉さんの松江は、いまの冷かに燃ゆるやうな

羽二重のなりで。——また居間から引返したの

が、外套の肩と摺違つた。眞黒な水瓶に紅梅の影が

映す風情で、框の三疊へ入交る。間着の褌の淺さに  
も、やゝ忙しい足の運びに、白脛の隠れたのは、友  
染のかくれ蓑、長襦袢を絞つて、萎して、腕に掛け  
て居たからである。

六疊の眞中へ、瀬戸ものゝ火鉢に、更紗形の座蒲  
團で、一寸見迎へて娘が招ずる。向つて、斜に、紙  
に格子を入れた芝居の書割のやうな小窓の下に、小  
さな鏡臺が据つて、一隅を取つた戸棚の前に、出来  
あひの長火鉢か置いてある。

松江の氣勢が、みどりを乾めて、薄紅に映るやう  
な、框の三疊の片隅へ、桑は外套を丸げて押した。

「飛んだお騒がせをして、濟まないね。」

「いゝえ、些とも構ひません。でも餘り失禮で。」

「すぐに（村咲）からと思つただけけれど、  
此方の都合が何うだか知ら。・・・此の頃は復  
興で、大分忙しいと聞いたから、お前さんが来てく  
れないと少々困る事がある。ー 太くお腹が空  
いて居るんです。待合へ行つて、いきなり御飯でも  
あるまいし、また御飯にした處で、生意氣に一人で

食べるのもさみしいし・・・此方で、お約束でもあつて手間が取れるやうだつたら、鳥屋か、何か、一度底を入れて置いて、それから出掛けようと思つてね。一寸覗きに來たんだがね。」

「結構ですわ・・・紐はそつちのを。」  
と、娘に低聲で、

「此の頃は、あなた、料理屋さんが何處でも嚴格になりましてね、三時間かつきり貰へません。・・・ですが、八時には伺ひます。・・・あなた餘程・・・お腹がすいて在らつしやいますか。」

「あゝ、餘程すいて居ますよ。」  
けはひに振り返ると、覗いた顔が微笑んだが、  
「まあ、お火がないぢやあないか、絹ちゃん、  
一寸、あちらへ何んなさいよ。御免かうむ

つて。」

黙つて、笑ひながら娘が來て、長火鉢の前へ、また蒲團を直して、

「何うぞ。」

と、軽く顔を傾けた。

「些と其處へは差出たやうだが、――では推参をしようかね。」

蒲團も薄い。座につくのが落込むやうに

床も薄い。火も薄い。灰も薄い。五徳の影が黒く映

る、底も薄いのに、ふと觸ると、鐵瓶の膚は冷くつ

て、肩の上の戸棚の隙間から、生壁のほひととも

に、二月の寒い風がぞつと身に沁みる。耳許に岩を

打ち、石を切るやうな、鐵鎚の音、手斧の響が、暮

方を又一しきり、トンカントンカントンと牙返

ると、木を起す音、寝かす音、臼を、投げるやうな

響きが交つて、づしん、どしんと鳴るたびに、しさ

も、白く薄い、床も、羽目も、障子も、襖も、ぶる

／＼と揺れ渡る。――炎のやんだ灰の山に、此

の薄い家は、たゞ柱を纏にした船である。

男は惻然として四邊を視た。

あゝ、數へて、ものゝ一年はまだ経たない。――

横町に此一軒、朋輩だちが「衣裳藏」と呼ん

だ、小ぢんまりとした土藏を門に控へて、しもたや

のやうに取り静めた、千本格子の土間深い奥の居住

には、さながら錦繪を散らしたやうに、娘分も、かゝ

へも雛妓も居たものだが、今めかしく言ふまでの事もない、九月一日の宵、唯一時に灰となつた。――うはさの出た村咲と言ふ――町が背中合せに成る――土地の草分で、埃も塵もこぼれ萩、電燈の影も月あかりのやうに奥床しかつた待合の、おとなしい女房が、地震の日の家を守つて、藏の前の茶の間に籠つて、丁度此の元藤家の二階の窓から火を噴出したのを視て、もうお了ひだ、と水を一杯、長煙管で一服吸つて、煙管を置くと、靜に立退いた、と言ふのを、――桑は、のちに訪ねて來た、おなじうちの女中に聞いた。

とばかりで、皆がちり／＼ばら／＼だから、當時は誰の行方も分らず、勿論、松江の消息も絶えた。……何の中で、ないまでも、十五六年來の馴染である。

四谷の方の山の手から、前に、はじめて界限を訪ねたのは、十月も、もう半ば過ぎ、電車の築地行きと思つたのが、日比谷から一なぐれに仙女香の邊まで焼原を持つて行かれた時は、大袈裟でも何でもない。見知らぬ島へ放たれた氣がした。風の、日の朱

の色の旗の南の天に高く翻るのを、あれは朝日新聞  
と、路傍の人の指すのを聞くと、濛々たる砂煙の中  
に、大煉瓦の青く顯れたのを見て、やがて、銀座の  
空の方角を思つたのであつた。

二時さがり眞日中である。日本橋の大通を行くの  
が、風に吹きまくらるゝ野中の開帳場の小屋掛を通  
るやうで、ふかし芋と草鞋を賣る乾店のうらの焼あ  
とに、圓鬚の御新姐風の、色白な婦の、盥で行水を  
する姿が、戸で圍ひつゝも露呈であつた。

赤い雲が其の空を浮いて行く

どれが何處の町だか、辻だか、一時寫眞によく出  
た、薇蕨を黒く束ねたやうな、あの、h鐵骨のあと  
を見るまでは、途に迷つて見當が着かなかつた。

杖なしには行き悩む・・・西中通、大工町、  
檜もの町邊、三味線の三筋の巷は、一面に焼瓦と壁  
と泥の丘に成り、土手を築き、崖に窪んだ、其の間  
を、蛭つて縫つて、赤く亂れた細露地は鼓を壊した

やうであつた。

思ひも掛けず清水が湧く。焼灰の中から、挫ながら水道の鐵管が覗くのである。中に小さな池を湛へて、一處さら／＼と松葉の波紋の寄るのがあつた。これに何となくイまれた。手に掬ふと、ほんのり白粉の匂がして、溝板をあゆみに投げた丸木橋に、ぬけ毛も櫛も可哀であつた。

こゝを行つて、恚う入つて、たしか、此の邊と思ふ元藤家の焼あとに、硝子の缺は光つたが、錦の帯の灰もない。尤も時經つて、雨も風も幾通りか通つた。立退さきの立札の見えないのは其筈である。切組んだ柱、積んだ木は、ばら／＼に散つて見えながら、まだ、大工の影も少なかつた。一軒、さいはひに、周圍が建ち、トタンが載つた假宅に、おもて四枚の硝子戸を半ば開けた、・・・・土間に飽屑の散らばつたのが、ばら／＼と風に亂るゝ中に婦が一  
人向うむきで、棧棧敷裏に憩ふやうに腰を掛けて居るのが見えた。「御免下さい。「こんな中で、藝妓家のたよりを聞くほど、氣の怯ける事はない。

「少々伺ひたいんですが、御近所に、たしかお鄰だ

つたと思ひますが。「はい、おやまあ……桑さん。」「やあ、お仙さん。」「まあ、あなた御無事で。」「お前さんも無事で可かつた。」

「おかげ様で、……あなた、松江さんを、おたづね下すつたのね。……あの人も無事ですよ。」と唇がしまると、聲が濕んで、ほろりとして、「御安心なさいまし。……でも、もう皆散々よ。——此の通りさ、あなた。——まあ、お掛けなさいまし、此方へ。……私の家ぢやないんですがね。——お葉さん。」

「あいよ。」と此の假宅のあるじ、おなじなかまで、色の浅黒いすつきりしたのが、引掛け帯の姉さんかぶりで働いて居た、手拭をはらひながら、框へ買ひたての可恐く綿の厚い座蒲團を敷いてくれたのに、腰をおろすと、傍のつんどの火鉢が、また脊が高くて灰が其の……焼あとで灰が少いは可笑いが、客商賣で此は綺麗にならしたから底の方に沈んで居るので、煙草をつけるのに、覗込むのも、やるせがない。「此方はね、當分、てんぷら屋をなさるんですから、ちとお通りがかりに。……すぐ明日が店開きで。」とお仙が言ふと、「此の

體裁で、いゝ氣なもんでせう。弟が河岸に居ますから、魚は請合ひますが。料理方は私ですから、その思召しで御鼻屑に。」「お前さん、うまくあがつたかい。」「あゝ、お午に揚げて見たよ。・・・」

・お前さんの饅頭のやうなものぢやあないやね。」

「おや、憚り。」と言つて笑つた。お仙は以前、吉原の仲の町に居た。二十ばかりの若い時、いろが出来て、無理に引いて、苦勞して、馬道で小饅頭を蒸して賣つた。うどん粉が一つもかへらないで、義理で買つたものは皆腹を瀉したと言ふのである。

桑は煙草をつけて吻とした、が目のさきに堆い焼砂を捲きつゝ、河岸へ哄と吹き通る、黄に赤い土煙は、それなり神田を突抜けに九段下まで大波を打つて凄じい。唯一息吹静まると、たとへに言ふも憚るけれど、箱根の大地獄を箕で打覆けたやうに見える、假宅の端居は巖端の孤屋に憩つた氣がした。大通りの電車、自動車も湯の湧く音に轟いて、響く手斧は訝である。「夢のやうだね。」「全くよ、あなた。」と向直つた、お仙の姿のかはりやう、氣も八端の不斷帶、縮緬育ちの姉さんが、紡績の黒緋に、

背負あげの紫、色はあせて、更紗の帯もめりんすらしい。肩を引いて、お仙は軽く胸を叩いた。「此の體です。夏の盛に此處らは餘計暑いでせう。私なぞ、手拭浴衣を着た切で遁げましたよ。」とお葉は茶を汲んで差置いた。「でも此方はじめ、私たち、白装束で、日本橋の橋ぼしらに立つ氣です。あつち、こつち、おともだちを捜しあひましてね、……はじめ顔を見ると、誰でも、ついうれしさに、そつと莞爾するあとから、ぼろ／＼と皆――お葉さんや、仙ちゃん、松江さん――と一度名を呼合つちやあ泣くんですよ。……あゝ、肝心あなたが、おたづねの松江さんも、あんな、かうとうな人ですが、白装束の勢です。歸つて來ます。うちも矢張り此の鄰家へ建てます。……・實は昨日逢ひました。……一旦目黒の方へ遁げましてね。静岡に豎氣のいとこさんがあつて、其處へ引取られて行きなすつたが、昨日の話で復興に極まりました。勿論、一度歸つたんですが、もうやがて四五日うちに來るでせう。随分大變な目に逢ひなすつてね、――松江さん許ぢやあ、いきなり入口の衣裳藏が崩れたから、若い妓なんぎ町内の

かしらが出窓から裏口へ抱出したほどだつたんです  
——そこへ掛けちゃあ私なんか身軽だけれど、  
それでも「どうも。」何うして……何處  
へ遁げたんだね。「船で鍛冶橋へ遁げるものも  
あるし、富士子ちゃんなんか其の方です。包を抱へ  
て青く成つて、河岸を駈出すのもありますね。仲通  
りの道の真中にづらりと並んで、洋傘をさして、ラ  
ムネをのんで、三味線と、鼓を並べて、お花見だ  
なんて真赤になつて、言つてるのもあるかと思へば、  
お櫃一つ前に置いて、毛布に坐つて、拜んでる人も  
ありますね——私は何しろ、目の悪い老女を控  
へて居ますから、莫蔭一枚、老女の手を曳いて「抱  
妓さんが三味線を持つて呉服橋を遁げたんですが  
ね。……何うでせう、あの廣い橋の上が、渦  
を捲いて、兩方の欄干へ、半分づゝ人の身體が横に  
湧上つて噴溢れて居たぢやありませんか。——  
渡つた處の土手の傍に、材木が積んでありまし  
た。……その材木にさ、お前さん——少々  
此處を拝借つて、何をとつちたんだかお辭儀をして  
さ、莫蔭を敷いて老女を坐らせて、さあ一息と思ふ  
と、何處からか、大な火の粉がばら／＼落ちて来る

んだもの。もう何うしようと思つて居る處へ客のな  
い自動車が一臺、楫の折れた船見たいで、ふら／＼  
と泳いで行きます。――運轉手さん後生ですか  
ら、盲の婆を助けると思召して――まあね、い  
ひ種は可厭だけど、……。抱妓さんが然う言つ  
て手を合せて拝んだのが利いて、お乗んなさいさ、  
お前さん――何でも構はず、往來の人が此の自  
動車へ乗上つたり、推込んだりするのに、また此の  
盲の婆がどのくらゐ御利益があつたか知れません  
――盲の婆さんが、然うか、と言つて、下りも  
すれば通してもくれたんですよ。それでもね、日比  
谷へ行くまでは眞晝間、平家の波がかぶつたやうに、  
車のまはりへぶら下つたり、攀上つたり、窓へ首を  
突込んだり。どかつと、それが、日比谷の處で、人  
間の雪崩のやうに離れて落ちましてね。吻と自分た  
ちの身體になつたんですが、車は、私の伯父のうち  
の澁谷へ向けて馳つたんです。處がさ、――そ  
の抱妓さんが、何うしたんだか、窓から顔を出して、  
肩へ附着けるやうにして、運轉手の背中を敲いて、  
貴方は神様だ、佛様だ、救世主だ、アーメンなんて  
言出したぢやないの。……。何うでせう、まる

で夢中の様子でね。實に俠氣だよ、俠だよ、消防夫  
だわよ、め組の喧嘩だわ。江戸兒だわ。こんな中で  
私たちを助けて下さるんだもの、ないわ、とても、  
探したつてないわ。お幾つでせう、まだおわかいの  
に、粹よ、ちやき／＼よ、花川戸の何代目でせう、  
なんのつて、のべつ幕なし。……餘りなお世  
辭だから、聞いて居るものははら／＼する。運轉手  
が腹を立てやしないかと、盲の老女は氣を揉んで、  
私の袖を引張るでせう。袖を引張つたつて、背中を  
突いたつて、氣が上ずつて、分りやしません。お禮  
を言ふわ、禮拜をするわ、時々黄色な聲を出して、  
大賛成、なんて喚くんでせう。のべつ幕なし、何う  
でせう、日比谷を出てから青山の終點あたりまで、  
息もつかずさ、お前さん、洒落や串戯でない證據に  
は、顔が青ざめて目が血走つて、唇がひつつつて、  
それで片時も饒舌りやまない、弱りましたよ、何うも  
ね。――黙つて、そつと入つて、土間に踞んで、  
お仙を拝んだ若い妓がある。「姉さん、何うぞ、  
何うぞ、もう。」「此の妓さ、桑さん。」――  
「いまは覺えて居ませんわ。」「弱い聲して、  
もう堪忍して、姉さん。」「おや、誰も叱言を

「言やしないよ。」  
「極が悪うござんすわ。少し氣が何うかして居たんです。……運轉手さんの心意氣が嬉しかつたもんですから。」  
「と言ふ。」

「心意氣と言へばね、桑さんや、……それで居て、お賃を取らうと言はないんです。何うしても要らないと言ふのを、まあ、無理に、心持ばかり推つけましてね。」  
「姉さん、判を。」  
「と小さな包を。」  
「あゝ、水道の屈けは濟んだかい。」  
「桑は茫然として聞いて居た。」  
「お仙さんの許も、もう直きかね。」  
「さいはひ、伯父が大工だもんで、すから、建てるばかりにして持つて來るつもりで、澁谷で切組んで居るんですよ。――まるで社會が違ふでせう。來る人の取次なんか、畏つて、入らつしやいまし、なんて言はうもんなら、先方で、よつと言つて吃驚さ。精々、おう、來や、上んなゝんか、勉強して、出來合の小姉えで居ますがね。朝の早いのと、お汁の辛いには弱るんです。別して當節の事だから、あけ三時半、もう井戸端さ、お前さん、煮立つたお汁にうつかり口をつけようもんなら、ほう／＼ほう、悪くひよつとこに成りさうよ。」  
「あゝ、安値なもんでも驕らうかね。」  
「いゝえ、

今日は然うしては居られません。」と軽く棲さきを組んで言った。「では、いづれ、私も、失禮しよう。」「あゝ、あなた、まあ、ご緩り。――晩の掃除ではありません。こんな處でも、奥へお通し申さうと思ひますのに、餘り塵埃が酷うござんすから。」とお葉が箒の手を止めた。「氣になすつちや可厭ですよ。」「飛んでもない、何事も此際です。すべて、バラックで結構ですよ。」「ざつくばらんを、以來バラックと言ひませうかね、――ほんとにね……。松江さんが聞いたら喜ぶでせう……。屹とお宅へも伺ひますよ。」「いや、そんな大した客ぢやない……。家には焼けなかつたが、御同然にバラックさね。」聲を揃へて、「お近いうち。」桑は洋杖を漕ぐやうに取つて、煉瓦の露地を河岸へ、ふら／＼と辿つて出た。

「お鄰家は繁昌しますか。」

「めしあがりたいの。」

と裙を曳いて、帯とけひろげの、朱のさや形の長襦袢を踏みくゞんで、自足袋ですつと松江が入つた。

娘が袖の傍を向うへ潛つて、窓下の姿見の蔽を拂ふと、その、お絹と、面影もあはせかゞみに、伏目に見据ゑて、ふつくりとおとなしく頤で一寸境めて、する／＼と一枚小袖の衣紋を合せ、ぐいと扱いて、軽く襟を抜いた手に、すぐ下じめをきりゝとしめつゝ、

「―― 待合さんをなさいますので、あの通り、夜を掛けて御普請中で、もう天麩羅屋さんは休業なんですよ。」 「然う、―― いや、まさか、此處で、てん井は食ひはしない。そんなに地まはりには馴れないから。」

「些と御勉強なさいましな。―― あゝ、いゝよ。」

と、娘が當てた帯をまはして、お太鼓にしやんとしめて、一寸帯腰にあがきを取ると、留の金具が、パチンと鳴つた。

切火を打つた、潔い音である。

長火鉢の前へ、端然と坐つて、

「失禮をいたしました。」

頸脚の又白さ・・・銀杏返も艶を増した。こゝ

は一服と言ふ處を、煙草を喫まぬも人がらである。

時に、向合つて顔を見た。桑の目を遣る方へ、松江も連れて――早や薄暗い欄間の方へ頭を向けた。焼けない以前のこの見當に、もう一昨年なくなつたが、旦那なる人の寫眞が掛つて居たのである。

それも焼けたか、今はない。

「何となく、晩方はさみしいね。」

「えゝ、つい無人だもんですから、あの娘がさみしがりましたね。」

「あなた、些とお遊びに。」

と、脱ぎかへを疊みながら、娘が罪のない目ではつちり見た。「震災當時にね、あなた、まだ一度もお目にもかゝりませんのに――焼出されまして時はあの娘が、何なんですよ。――あなたの處へおたより申さうと言つたんですよ。」桑は思はず、胸が切つた。

「心だけでも嬉しいな――来ればいゝのに。」

「ですが、」

と一寸下ぶせに目を外した。

「あゝ、唯今お茶を――」「いや、時間だ。――」

「さあお出掛け。……家業が肝心だから。」

「御飯は？」

「どうにか我慢が出来さうだ、村咲へすぐ行きま  
す。」 「ぢやあ、然うして下さいましな。一口め  
しあがつて下されば、三時間たらず、じきたちま  
すから。．．．．．精々時間を切詰めます。」

「それぢやあお約束の方が迷惑だ。大丈夫待つて  
居ます。――然やうなら。」

「あれ、氣が早い、お待ちなさいまし、御一所に、  
其處まで．．．．．」

「あゝ、然う。――秋島はおなじ見當だつけ。  
門口を衝と出ると、溝の溢れで、溝板が浮いて、  
足が留つた。」

「姉さん。――  
と娘が呼ぶ。」

松江は駒下駄を穿いた處。

「お母さんとお言ひ。――此方は大事なんだ

よ。

「えゝ、お母さん。――早くね、早く歸つて

ね。

「何だね、お絹。」

「だつて、私、さみしいんですもの。」

「あいよ。――ねんねえで困つちまひます。」

「足場が悪いですから、お氣をつけなすつて……」

「桑は黙つて、うつむいて辿つた。」

傍へ並びもせず、二三尺内端にさがつて、お端折りながら、すら／＼と、梅のかをりの衣の音。

「……のちほど。」  
横町へすつと切れる。

「や、もう来たか。」

焼あとは、大分の町並が、つい目の前で、辻に打撞つたやうに驚いて分れたが。――「一度も、

お目にかゝりませんのに――焼出されました時は、あの娘が……あなたの處へお頼り申さうと、……桑はしみ／＼と思の胸に繰返した。

――「お母さん、早く歸つてね、あたし、さみしいんですもの。」  
更に身に沁みて繰返した。

ぶつかり放題、角の煎餅屋で、煎餅をめちやくちやに買つて、大きな包みを、風呂敷もなしに引かゝ

へて、つか／＼と元藤家の門へ引返した。

お絹の起居の影法師を、臺所に透して、廂合を裏へ廻ると、母さんの手だすけに、此の裏口を店にて、娘がお煮染を拵へて賣つて居る。近所の女中の買手が一人。――天鵝絨の足袋で立働らいて、鉢に装つて渡すのを待つて、入かはつて、桑は樹のやうにすつくり立つた。

「お絹ちゃん　――」

あはれ、逢初めてから十幾年、力のないのを憚つて、口へは出さない、思ひ戀ふる一念が、松江の乳を通つて、娘の血には徹つたのである。

しばらく言葉が途絶えたが、

「ありがたう、私は絹ちゃんに禮を言ふ。」

と、娘の顔を熟と視た。

お絹は鬢を撫で、莞爾した。

【完】